

学生が抱く父親への子育て支援観の変容

— 子育て支援広場での学生の気付きに着目して —

長谷川美香 狩野奈緒子

Changes in Student's Views of Child-Rearing Support for Fathers

— Focusing on student awareness at the childcare support plaza —

Mika Hasegawa Naoko Kanou

Abstract

Fathers also participate at the childcare support plaza of Sakura no Seibo Junior College. We interviewed second-year students for research to clarify how students' views of support for fathers are changing through the childcare support plaza. As a result, through participation in the plaza, it became clear that there was less embarrassment for fathers and various awareness was developed. It also led to the understanding that childcare support is not limited to mothers but also needs the assistance of fathers.

Furthermore, beyond our imagination, it was discovered that students were drawing out their father's thoughts. It was also understood that the fathers themselves understood the significance of participating in the child care support plaza.

Key words : Child care support, Father, Student growth, Relationship between father and student

I. 問題の所在

本学で開催されている子育て支援広場、「さくらっこ広場」¹(以下、「広場」と記す)には、母親だけでなく、毎回、父親が参加する姿も見られる。普段は参加していないものの、母親と子どもの付き添いで参加したと思われる父親もいるが、参加する父親には、毎回のように子どもと参加し常連となっているケースが多い。

父親達が「広場」に参加したばかりの頃は、硬い表情で他の保護者とかかわりを持つことは少なく、子どもにびったりと寄り添っていたり、子どもが学生と遊んでいる姿をじっと見つめていたり、慣れない場所でどう振舞えばいいのか緊張している様子がうかがえ、それは「広場」に参加したばかりの多くの母親の姿にも共通する。しかし、参加する回数が増えてくるに連れて、学生に子どもを預け、顔見知りになった保護者同士で会話をし、本を読む、ピアノを弾くなど好きなことを楽しむ、短大教員に子育てに関する質問をするといった姿や、学生と子どもが遊んでいる様子を少し離れて笑顔で見守っている姿が見られ、当初、子どものために参加していた「広場」が、他の保護者から子育ての情報を得る、日々の忙しさから気持ちをリセットさせる、子どもが学生とかかわり成長する姿を見守るといった目的を持って、自分のためにも参加しているように感じられる。そして、それぞれの父親が「広場」の中での自分の居場所を見出し、それが、一緒に子どもの成長を見守り、和気あいあいとした雰囲気の中で活動するという「広場」の姿にも繋がっていると言える。

こども保育コースの学生²は、授業の一環として、または自主的に1年次から「広場」に参加している。筆者らのこれまでの研究では、子育て支援広場での実践を通し、学生の保護者へのイメージや思い、かかわり方、子育て支援への捉えが変容すること、そして子育て支援力の育成に繋がっていることが分かっている。しかし一方で、「広場」で父親の姿を目にしながらかも、授業等で「子育て支援」と言うとき母親を対象としてイメージする学生が少なくないのも事実である。筆者らが述べた本学学生の子育て支援広場を通した2年間の「子育て支援の捉え」や「保護者とのかかわり方の変化」自体、学生の中では、母親を対象としている可能性がある。

小崎(2017)は、社会的に多様化する父親のための支援は、当事者支援と共に、企業や機関などのかかわり方や環境の整備の総称と捉え、社会全体の子育てにかかわる取り組みを包括するものであると述べた。具体的な視点として、知識理解などのエンパワメント、夫婦間のパートナーシップ、仕事や家庭、地域とのかかわりを含むワークライフバランス、そして父親自身が育児や家庭生活の主人公として暮らしていけるネットワークという、4つの視点を挙げた。

すなわち、「子育て支援=母親支援」という概念を崩し、パートナーシップ、地域や社会とのネットワークを構築出来る力、家族が育む力を支援するために、父親も「子育て支援」の対象となることを、保育者養成段階から学ぶ必要があると考えられる。

本研究では、学生の子育て支援力育成のための一つの試みとして「父親支援」に焦点を当て、「広場」での実践を通し、学生の父親への子育て支援観はどう変容するのかを明らかにしていく。

II. 研究の目的

本研究の目的は、これまで「広場」に参加してきたこども保育コースの学生が、父親とのかかわりを通してどのように父親の見方や子育て支援観が変容するのかを明らかにし、特に子育て支援力に注目して子育て支援広場における教育的効果を検討することである。

学生の子育て支援力育成のための先行研究は、保育者養成校の学内や地域の子育て支援広場における母親とのかかわりを通した実践を基にしたものが多く、父親に焦点を当てた研究は少ない。

保育職に就き、保護者とのかかわり方に悩みを抱く卒業生もおり、本研究は、保育者養成段階で保育者としての専門性を高める糸口になるだけでなく、保育者となってからのキャリア教育にも繋がるものになり得る。

III. 研究の方法

本学こども保育コースの2年生4名に対し、半構造化面接法による個別インタビューを行い、質的に分析、検討した。インタビューは時期をずらし、研究の目的、方法、個人が特定されないことなどを説明し、同意を得たうえで、それぞれの学生に2回行った。

こども保育コースの学生は2年間で、土曜日の「広場」や平日の「親と子の広場」といった学内の子育て支援広場での活動を含めた複数の科目を受講する。その他、学生により参加回数に差はあるが、保育の学びを深める目的で自主的に参加し、子どもや保護者とのかかわりを持っている。

2年生になってゼミでの自分の研究テーマに関して調査をするため、あえて保護者と意図的にかかわりを持つ学生もいるが、参加する様子からは、特に2年生になると、子どもと遊ぶことをきっかけとして、その保護者と子どもに関する話をし、時には何気ない世間話をするなど、自然な形で会話をする学生が多い。

筆者らがこれまでの研究で行った学生インタビューでは、1年生の頃は、保護者の目線が気になり、緊張して自分から話しかけることは少ないが、2年生になると保護者に対する恐怖心が減り、保護者とのかかわることによって得るものがあると感じられるといった声があった。また、2年生になると、自分が子どもと遊ぶことで、保護者が他の保護者と交流を持てる、一時的に子どもから離れてリラックスすることが出来るなど、保護者にとってのメリットを考えなが

ら行動しているケースがあることも分かった。そのため、本研究では調査対象を2年生とすることで、子育て支援広場での参加を通じた自身の変化についてより詳細に話を聞くことが出来ると考えた。

調査対象の4名には、父親の参加が多い「広場」での体験を基にインタビューをした。1回目のインタビューでは、2年次に複数回「広場」に参加した折に、1年次からこれまでを振り返って、「広場」に参加する父親に関する所感を中心とし、(1)「広場」で話をしたことがある父親について、(2)どういった話をしたか、(3)「父親観」は変化したか、(4)母親と父親への子育て支援の違いについて思うこと、(5)父親への子育て支援に必要なことは何か、5つの項目を中心にインタビューを進めた。

2回目のインタビューは、学生N、学生Wが、それぞれの卒業研究テーマに関係する質問を準備し、「広場」において、関係する父親と母親から聞き取りを行った3日後に行ったものである。学生Nのテーマは「インクルーシブな保育環境を考える」(仮題)、学生Wのテーマは「地域子育て支援広場の児童虐待予防の機能を考える」(仮題)となっている。学生T、学生Rは卒業研究テーマを子育て支援に関するものにしようと考えており、学生Tは、保護者がどういった子育てに関する不安を抱えているのか、子どもの年齢別に把握したいと考えている。学生Rは、地域子育て支援センターと本学の「広場」での調査を基に、保護者にとって子育て支援の場がどういった影響をもたらすのかを研究したいと考え、その参考になればと、学生Tと共に「広場」に参加し、同日にインタビューを行った。2回目のインタビューをした時は、学生T、学生Rに比べ、学生N、学生Wは頻繁に「広場」に参加していた時期であり、父親とかかわりを持つ機会が多かった。

インタビューの後は、回ごとにインタビューの内容から分析を試みた。話の内容を記録したものを丁寧に読み、父親への思いや、気付きを中心に、類似性のある言葉をコード化した。コード化したものはさらに分類し、類似性のあるものをまとめサブカテゴリー化し、さらに類似性に従ってカテゴリー化した。

IV. 研究の結果

主なインタビューの内容とそれに対する語りをまとめたものが、以下の通りである。インタビュー1回目と2回目、それぞれの結果をまとめた。

学生Nと学生Wは、第2筆者のゼミ学生である。2名とも、1年次より自主的に「広場」に参加し、親子とかかわりながら、子どもへの遊びを通じた発達支援や関係支援と同時に、保護者支援、親子関係支援についても考える機会を持ってきている。学生Tと学生Rは、第1筆者のゼミ学生で、1年次では自主的に「広場」に参加することもあったが、2年次になってからは参加回数が減っている。そのことで、久しぶりに会う子どもや保護者の成長をより感じることもなっているようだった。

なお、インタビューで出た父親についても、学生同様にアルファベットで表記した。同じアルファベットの父親は同一人物である。

1. インタビュー1回目の概要

表1に、インタビュー1回目の概要を記す。

表1 インタビュー1回目の対象と概要

インタビュー担当者	第2筆者	第2筆者	第1筆者	第1筆者
対象学生	N	W	T	R
インタビューを行った 時期・場所	2019年8月 研究室	2019年8月 研究室	2019年8月 カフェテリア	2019年8月 カフェテリア
インタビュー総時間 質問項目	15分 (1)~(5)	9分 (1)~(4)	20分 (1)~(5)	20分 (1)~(5)
インタビューの 主な内容	(1) 話をした父親について (2) 話の内容 (3) 自分の「父親観」の変化 (4) 母親と父親への子育て支援の違いについて (5) 父親への子育て支援に必要なこと			

2. 学生Nのインタビュー1回目の語り

(1) 話をした父親について

父親A：3歳 一卵性双生児 男児2名

(毎回、父親のみが参加する。)

父親B：3歳 女兒、7歳 男児 (ASDの診断) きょうだい

(毎回母親が主に参加するが、両親同時の参加、父親と子どもの参加の時もある。)

(2) 話の内容

どちらの父親とも、子どものいる場で何気ない日常会話として話しかけたところ、それぞれ快く応答した。

① 学生Nと父親Aとの話の内容 (2年次)

「休日はよくパパと遊ぶのか、どのような遊びをしているのか」聞いたところ、「普段は、母親が子育てで忙しいので休日は「自分が子どもたちを見るように心がけている」こと、そのうえでこの「広場」の存在はとても助かっている、「できるだけ連れてくるようにしている」と話した。

「広場」保育室に隣接している短大施設のピアノ練習室(個室)について、自由に「広場」参加者にも開放されているが、父親Aはよく利用している。父親Aは子どもたちが好きな「シンカリオン」の曲を練習しているのだと話した。

これは、子ども達の好きな曲を弾いて、それぞれが「音楽に興味を持って欲しい」という願いがあるからだと話した。

実際、父親Aがピアノを弾いているときに、子どもたちも入って行って、一緒に鍵盤に触れたりするようになってきたと話してくれた。子どもがピアノ室に入って、一緒に鍵盤をたたいている様子を見ることも出来た。

このような内容の話を通して、学生Nは父親Aが「子どもたちが、音楽にこのように親しんでいけること」を見通して、ピアノ室で曲を練習する姿について、「とても積極的」に育児について考えているという印象を持ったと、述べた。

「どうしても、お母さんみたいに、育児にかかわれないっていうか、お仕事も忙しかったりするから、(子どもにかかわる)時間もなかなか取れないだろうと思っていたけれど、空いている時間をフルに子どものために当てるっていうか、考えているんだな、いいなと思いました」とも述べた。

同時に、「お父さんに対する見方」が「すごく変わった」とも語った。

② 学生Nと父親Bとの話の内容（2年次）

最初に、父親Bがよく日焼けしていたので、「何か、スポーツをしていらっしゃるんですか」と、趣味の話をしてみた。すると、サーファーだと、話してくれた。

「それで焼けているんですね」と、話しを続けると、「朝5時には（相馬で）波に乗れるように」出かけている。しかも、そのあと、「9時には家に」帰っているのだと、聞いた。

休日の9時から、子どもとかかわれるように、海から帰ってくるのだと聞いて、驚いた。自分の趣味だけに休日の時間を使う訳にはいかないから、「子どもたちのために時間を確保する」ために、このようにしているのだと聞いた。

また、子どもたちは、まだ海に入ったことはないが、水に入ることは（プールなど）は好きなのだそうだ。父親の姿を感じているのだと思った。

父親A、父親Bの休日の時間の使い方や、子どもとの向き合い方を聞いた学生Nは、「自分の趣味や楽しみの、「ピアノ」や「海」などを通して、それぞれ形は違っても、子どものことを考えている」と、父親たちについて語った。「好きなことを通して」子どもとかかわる父親の姿を「パパだから出来るんだ、と思う」とも、述べた。

(3) 自分の「父親観」の変化

学生Nは「今までは子育てに積極的にかかわるのは『ママ』だと思っていたが、こうして父親達が色々な形で『子育てにかかわろう』とする気持ちが、とても強く伝わってきた」と語った。「パパは、パパなりにそれぞれの形で、一生懸命頑張っているんだ、ということが、よく分かった」とも述べた。

一方、「休日だけお父さんがこうしてかかわっていることを、お母さんたちはどう思っているんだろう」という懸念にも言及した。

(4) 母親と父親への子育て支援の違いについて

学生Nは、父親への子育て支援について、「これだけ頑張っているんだし、気持ちも強いんだから、それぞれ困っていることも違っているけれど、聞いていきたい」と述べる一方、「お母さんたちにどう思われているか」についても言及した。

また、父親Aがどちらかという、子どもたちと「一緒に遊ぶ」ことを優先したり、「おやつ作り」に参加したり、保護者同士の話の輪にも参加する様子である一方、父親Bは、我が子を「見守る」姿勢であることに気づき、「それぞれの思いがある」と表現した。

(5) 父親への子育て支援に必要なこと

学生Nは、父親Aが保護者交流などの「つながりを大事にしている」様子を見て、「家でもパパ自身の時間がないのかと思う」とも述べた。

「ピアノを家では弾けない」事情も考え、「広場では少しでも、パパがピアノを弾いてもらいたい」と「子どもたちを見ていたら」帰り際に「今日は、好きにさせてもらいました」と、声をかけられて、「良かったと思った」とも語った。

母親と父親の立場の違いや、子育てへのかかわり方の違いを感じながら、父親への独自の子育て支援の必要性について、「夫婦の子育てに対する思いが、全く違うのかもしれない」と述べ、「両方とも大事にしたいって思いました」と語った。

3. 学生Wのインタビュー1回目の語り

(1) 話をした父親について

父親A：3歳 一卵性双生児 男児2名
(毎回、父親のみが参加する。)

(2) 話の内容

① 学生Wと父親Aの話の内容（2年次）

「似てますねえ」とか、私の方から軽い感じで話しかけたら、「つむじの向きが違って」とか、答えてくださったのが最初だった。

ちょうどその時、双子の一人のMくんが機嫌が悪くてぐずっていたら「こっちのほうがお兄ちゃんなんですけど」なんて言っていて、「そうですか」なんて私が答えたりしたら、そこから（双子だけれど）「結構違いがある」ということを話してくれた。

父親が「私にはわかるんです」というように、色々教えてくれた。

私は「そうですか、さすがですねえ」などと言った、たわいもない話をしたと思う。

父親は、「話をしたそう」で、「ほんのり笑顔で」話をしてくれた。

「最近、喧嘩することが少なくなってきて」「物の取り合いも少なくなってきた」とか、子どもたちの様子を見てると、その通りなので「そうなんだ、成長が早いな」などと思った。

学生Wに対して、父親Aが、「父親だけにしか分からない」子どもたちの特徴や、育ちの歩みを「ほんのり笑顔で」話をしたそうに話したと、語った。

また、学生Wは、「どうしても、子育てっていうと、お母さんっていうイメージがあったんですが、このお父さんは、お母さんのためにも「広場」に子どもたちを連れてきて、努力家っていうか」と、父親Aについて語った。

「抱っこした様子とか、おやつを食べるときなんか、あげてる様子を見ると、結構慣れている感じだったので、(普段から、食べさせることも) やってるのかなって」感じたことを、述べた。

(3) 自分の「父親観」の変化

「今は『イクメン』とか、お父さんの子育て支援の言葉も出てきているけれど、『やっぱ、そんなに変わっていないのかな』って思う」と、述べた。

一方、父親Aが「(広場に置いてあった) イベントのチラシを見ながら、他のお父さんやお母さん達と、『これ行くんですか』なんて話をしていた場面気づき、「私聞いちゃっていいのかな」と感じるような内容の話もしており、「困ったことなんか話していけるのかな」と、思ったことを述べた。

このような(交流の)場が父親には少ないことに触れ、「どうしても、産んだのはお母さんだから、お父さんは自分から何とかしてかかわっていかないと、(子育てに関し変わることが) 出来ないのかなって」と、父親なりに子育てにかかわっていくことの難しさについて語っている。

また、父親Aが「父親としては珍しいタイプじゃないかと」思うことを述べ、「この場に、お父さんが来るっていうのは、すごいことだと思います」とも述べた。

(4) 父親への子育て支援に必要なこと

「お母さんは、自分で産んでいる訳だから、ある程度知識とかも持っている」一方、「お父さんの方は違うのかな」と思うこと、「例えば、妊娠中から、どんな感じなのかとか、安静にしなきゃとか、たばこはだめとか、そんな(基本的な)ことから知らないとしたら、(知識が) 必要なんじゃないか」と、述べた。

父親にしてみると、「自分のことじゃない訳ではないけれど」、「お母さんのようにお腹を痛めて生んだ訳ではないから」「『こういう時は、こう』』というような知識」も必要ではないか、と語り、父親の側も戸惑いがあるからこそ、「子育てに、母親の様には子どもとかかわっていけないのではないか」ということに言及している。

4. 学生Tのインタビュー1回目の語り

(1) 話をした父親について

父親C：7歳 男児

(毎回、父親のみが参加する。)

その他、父親Aや、名前は覚えていないものの、平日の「親と子の広場」に参加した際、母親（妻）と参加していた父親と話したことがあるなど、1年次から数回父親と話をしたことがある。

(2) 話の内容

① 学生Tと父親Cとの話の内容（2年次）

おやつを食べる時間、自分と一緒に食べずに片付けをしていたところ、父親Cの子どもが外に行きたそうな様子で、寄って来た。

聞くと、「お父さんに『お姉さんと行きなさい』と言われた」と話していた。

父親は他の保護者と話をしたい様子で、「すみません、よろしくお願いします」と自分に頼んできた。

学生Tは、「広場」で父親に自分から積極的に話しかけるといよりも、父親から話しかけられたことが多い。

インタビューで話をした、このエピソードについて、「一言で何でもないようなことだけれど、頼りにされているのかなと思った」と、嬉しさを感じていた。

(3) 自分の「父親観」の変化

父親Cについて、「感じ方が今も変わっていない」と話した。父親Cに対しては、1年次から、一生懸命に子育てに参加している父親というイメージを抱いていたようで、それは2年次になっても変わらないようである。

また、「広場」に参加する父親だけでなく、世間一般の父親に対するイメージの変化に触れ、「私のお父さんは『子育てを手伝ってくれなかった』とお母さんがよく言うから、そういうイメージが以前はあったんです」、「広場に来ているお父さんを見て、『こういうお父さんもいるんだな』と感じ方が変わりました」と述べた。

さらに、実習で保育所に子どもを送迎する父親の姿を多く見かけたことも、父親観が変化したきっかけとなったと述べ、「私達の時は、お母さんが難しい時は、お爺ちゃんやお祖母ちゃんが手伝っていた人が多い気がする。お父さんが多くて、びっくりしました」と語った。

(4) 母親と父親への子育て支援の違いについて

母親、父親への支援について言及する前に、「お父さんと子どもが広場に来ている時、きっとお母さんは自由に子育てに縛られていないと思う。そういうのがいいなと思う」と述べた。父親が子育て支援広場などに子どもと一緒に出掛けることで、母親（妻）が子どもから離れ、自由に使える時間を持つことが、父親からの母親への支援になっていると感じている。

「お父さんも子育てに前よりも参加しているけれど、それでもやっぱり子育てはどちらかというとお母さんだなのというのがまだまだ一般的にはあるから、お父さんがどこまで子どもにかかわっているかによって、母親、父親への

支援というより、その家庭への支援が違ってくと思う」と話した。

(5) 父親への子育て支援に必要なこと

本学の「広場」には、毎回のように父親が数名参加しているが、一般的に子育て支援広場には母親が参加することが多いことに疑問を持ち、「何で母親が多いんですかね？父親も参加しやすい雰囲気の場所が増えればいいのに」、「もし父親が参加して、お母さんばかりだったら、せっかく行っても居づらくなる」、「子育てはお母さんっていうイメージを多くの人を持っているから、そういう場所にお父さんが行けない」と、父親が子どもと参加しやすい子育て支援広場の必要性について述べた。

さらに、「そもそも、母親への子育て支援、父親への子育て支援って私達が考えてしまうことがおかしい」とも話し、「母親は『全く父親は子育てしないで』と思うけれど、父親からすれば『だって子育ては母親っていうイメージがあるから、やりづらんだよ』っていうのがあるかも知れない」と、子育て支援の課題を提起した。

5. 学生Rのインタビュー1回目の語り

(1) 話をした父親について

父親A：3歳 一卵性双生児 男児2名
(毎回、父親のみが参加する。)

(2) 話の内容

① 学生Rと父親Aとの話の内容（1年次）

双子の一人と遊んでいる時、車が好きだということを知っていたので、危険のないように子どもを抱えながら駐車場で車を見ていた。
ただ、お父さんは何故だかそれを見て心配そうにしている、「家でも同じようなことをやっちゃうから」と話していた。それでも私は子どもに見せたくて、今（2年次になってから）なら父親が心配する気持ちも理解出来るが、その時は「見ているから、大丈夫ですよ」と声をかけ、車を見ていた。

学生Rは、「広場」で父親Aの姿を見る度に、父親Aが一人で二人の子どもをみる大変さを感じてきた。これまで何度か、「私が見ますよ」と声をかける、または父親Aの方から「見ていてもらっていいですか」と頼まれ、双子の一人を預かり遊ぶことがあったそうである。

2年次になり、保護者の思いにも目を向けられるようになり、「今だったらお父さんが心配するのも分かるから、あの時と同じようにしたか分からない」そうで、1年次は子どもの気持ちを優先したい思いが強かったことも分かる。

② 学生Rと父親Aとの話の内容（2年次）

「ピアノ弾きたいんでいいですか？」と、ふいに父親が話しかけてきた。
「いいですよ」と答え、私が子どもを見ていた。
「以前はあわわわしてて、常に心配そうに子どもを見ている感じだったけれど、そういう風になっちゃったんだ」、「広場に慣れてきたからか、最近は、楽しんでいる」とも感じている。
また別の時には、何かの時に、父親が「（子どもを見るのが）大変なんですよ」とポロっと私に話したことがあった。

2年次になってからも、「広場」に参加した際に父親Aとかかわる機会があった学生Rが、父親の変化への気付きについて述べている。

さらに、父親が学生に子育てへの困り感を伝えていたことについて語った。

(3) 自分の「父親観」の変化

「最近、我が子をSNSに挙げているお父さんが結構いるんですよ。エピソードとかも載せたり」、「昔は男は仕事みたいに考えていたけれど、そういう風に（SNSに）挙げたり、広場のような所に一緒に来たりするっていうのは、昔の父親も愛情はあったんだろうけど、愛情のかけ方が違うんだなって思います」、「広場のような所に、今ってお父さんと来るんだなって最初は思った」と語った。

学生Rも、実習中での経験も話し、「遠足で夫婦揃って参加している人もいた。いいなあって思った」、「私はお父さんは仕事で、一緒に遠足なんて考えられなかった」と述べ、幼少期の経験から描いていた父親像が、「広場」や実習での経験を通し、変化していることがうかがえる。

(4) 母親と父親への子育て支援の違いについて

「お母さんはどちらかというと、子どもの成長について細かいところまで気にしていそうだけど、お父さんは普段は仕事で忙しいから、そのことで子育てに思うようにはかかわれないという悩みの方が大きい気がする」と、母親、父親の子育てに関する悩みの違いを想像しながら、それぞれの支援の違いがあるのではないかと述べた。

(5) 父親への子育て支援に必要なこと

十分に子育てにかかわることが出来ない父親の現状を捉えながら、「お母さんに比べて子どものことを知らないこともあるだろうから、お父さんには『こういうことも好きなんですよ』、『こういうことが出来るようになりましたよ』ということを知らせてあげるっていうのがいいと思う」と、自分なりの考えをまとめていた。

6. インタビュー2回目の概要

表2に、インタビュー2回目の概要を記す。

表2 インタビュー2回目の対象と概要

インタビュー担当者	第2筆者	第2筆者	第1筆者	第1筆者
対象学生	N	W	T	R
インタビューを行った時期・場所	2019年10月 研究室	2019年10月 研究室	2019年9月 保育室	2019年9月 保育室
インタビュー総時間 質問項目	18分 (1)~(5)	18分 (1)~(5)	15分 (1)(2)(6)	15分 (1)(2)(6)
インタビューの 主な内容	(1) 学生が聞き取りを行った保護者 (2) 聞き取りの方法と内容 (3) 父親の「子育て観」について (4) 学生自身の「父親観」の変化について (5) 父親の「子育て観」の育ちについて (6) 父親に対して思うこと			

7. 学生Nのインタビュー2回目の語り

(1) 学生が聞き取りを行った保護者

父親A：3歳 一卵性双生児 男児 2名

(毎回父親のみ参加する。聞き取り当日は、初めて後半のみ母親が父親と交代して参加した。)

父親B：3歳女児、7歳男児（ASDの診断）きょうだい

(聞き取り当日は、父親がきょうだいを連れて参加し、終了近くに母親が合流した。)

(2) 聞き取りの方法と内容

「広場」開催中、様子を見ながら、二人の父親にそれぞれ話しかけ、保育室やテラスのベンチなどで、快く聞き取りに応じてもらった。

基本的に、学生Nが考えてきた同じ質問に対して、両者から別々に回答をもらう形とし、半構造化面接法の手法をとった。

基本的な質問は以下のとおりであるが、話しはそれぞれ別の方向へ向かった部分もある。

- ① 子どもとのかかわりで大事にしていることは何か
- ② 子育てで、困っていること
- ③ 子育てに関して嬉しいこと
- ④ 居心地の良い環境はどのような環境だと考えるか

これらの内容を聞き取った、学生Nの所感をまとめる。

(3) 父親の「子育て観」について

父親A、父親Bに聞き取りをして、それぞれの子どもとのかかわり方や、「広場」へ参加する様子など見ると、一見対照的な部分もあると思いつつ、聞き取りを開始したが、「二人とも、ママに言われて子育てに参加しているのではなくて、自分からかかわっているのだということ」に気づき、「すごい」と感じたことを、学生Nはまず語った。

① 父親Aの子育て観

Aさんは、ママのことを考えて、大変だなんていうことを考えて、「ママが一人で子育てしてるんじゃないだよ」ということを伝えたくてというか、それで「広場」に来ているっていうことが分かりました。

また、父親Aは「多胎児の虐待のリスク」などの話も交えながら、母親（妻）のフォローをしていることを語り、父親が子育てに関して、深い知識を兼ね備えていることにも気づいたと語った。

その後、双子が育つ環境に対する期待として「障害を持っている子どもとか、いろいろな子どもの中で、一緒に育ててほしい」と語りながら「やらせる保育・教育」に対する抵抗感や、自分の子ども時代の生活環境などにも触れながら、自分は育児に積極的にかかわりたい希望を、以前より持っていたことも聞き取っている。

一方、父親Bの子育て観の聞き取り内容は以下のとおりである。

② 父親Bの子育て観

子どもが好きで、子育てしてるっていうことをおっしゃって、それは同じで、さくらっこに来るのは同年代の子どもとかかわらせたいっていう話をしました。

自分の子育ての仕方は、「鉛と鞭」だっておっしゃってて、怒っているだけではだめだから、怒ったらアイス買うとかしてるって（笑い）そうしてるそうです。

また、父親Bも虐待のリスクに触れながら「虐待は、怒るのと違うから、手は出したらダメだ」と言う一方、「駄目だよっていうのは、大事だよ」と繰り返し話し、父親自身が確固とした子育て観を持っていることに気づいている。

また、子どもに対する感情として、ASDの第1子に対しては「お兄ちゃんの話は、（障害があっても）ほかの子よりどうしても手がかかったから、その分愛情が強い」一方、第2子にも「女の子だしかわいい」と、それぞれへの深い思いを父親から聞き取っている。

父親Bはサーフィンを趣味とする人であるが、海の話などした後に、子どもたちの過ごす保育環境について、「保

育者は子どもの個性を引き出してほしい、チャレンジする機会を作ってほしい」と語るなど、自らの生活から得た人生観を自然に子育ての中に活かす視点を持つ父親であることにも気づき、その視点について「保育っばい」と、学生Nは表現した。

このように父親A、Bの子育て観は、それぞれ違いはあるものの、両者とも自身の「子育て観」を持ち、それに従って、「自分から積極的に」子育てにかかわっていることを、確認している。

(4) 学生自身の「父親観」の変化について

学生Nは、自身の家庭もそうだったが、一般的に子育ての中心は母親であり、父親はその補助的な部分を担っていると感じていたことを挙げながら、この度の聞き取りで、次のように認識が変化したことを語った。

③ 学生Nの父親観の変化

いやあ、ママのことも考えているし、本当にママ以上に深く子育てについて考えていることもあるし、パパってすごいと思ったんです。

このように、従来一般的な「父親観」より、この「広場」に参加する父親の意識は、それぞれ違いはあるものの、より、積極的であり深い思いや知識に裏付けられているということに気づき、学生自身の「父親観」も変化していることがわかる。

(5) 父親の「子育て観」の育ちについて

特に父親Aからは、母親（妻）が出産前後にマタニティーブルーになり、そのフォローのために積極的に育児にかかわり始めたが、その後「広場」の保護者交流や、子どもたちの育ち、また母親の意識の変化などと相互に関連しながら、自身の子育て観が、変化していることも聞き取っている。

また、父親と母親の育児感が食い違うこともしばしばあり「言い合い」になっても、「それも必要なこと」と言い切る父親の言葉に、父親と母親双方の育ちあいや、「子育て観」も母親、父親、共に育ちあっていくことにも気づいている。

そのために、「広場」が父親支援の場としても機能することも語った。

④ 「広場」の父親支援の場としての機能についての語り

お父さんは、「広場」を自分から求めている、助かっているっていうか、一人じゃないって思える場だって思えるって言っていました。

8. 学生Wのインタビュー 2 回目の語り

(1) 学生が聞き取りを行った保護者

父親B：3歳女兒　7歳男児（ASDの診断）きょうだい

（聞き取り当日は、父親がきょうだいを連れて参加し、終了近くに母親が合流した。）

母親B：父親　3歳兒女兒、7歳兒男児　きょうだいの母親

(2) 聞き取りの方法と内容

「広場」開催中に、保育室やテラス、砂場付近で、基本的な質問を両親それぞれにしながら、聞き取りを行った。

- ① 「広場」に参加して肩の荷が下りたことはあるか
- ② 「広場」に参加してよかったことは何か

(3) 父親の「子育て観」について

最初、初めて話しかける父親Bに対して、「話しかけるタイミングが、分から」ずに困り、「肩の荷を下ろしたこと」を質問しても、考え込んで、答えが出てこない様子を見て、躊躇したスタートだったと、語った。

その後、「学生が遊んでくれるから助かる」「同年代の子どもと遊べる」と、父親は答えたが、この広場への参加のきっかけを聞くと「ヨメが来たから」と答え、その母親（妻）がここに来た理由を「わからない」と答えるなど、学生側が戸惑う答え方だった。

ところが、趣味のサーフィンの話になると、とたんに生き生きして、その後の「広場」での行動の様子も自由で、サーフィン仲間に電話したり、スマートフォンの画面を見たりする場面もしばしばあった。

前回8月に話をした、父親Aはどちらかというと「真面目」で、それに対してこの父親Bは「不真面目」ではないが、実に自由で、自然体であることに驚いたという。

また、父親同士やほかの保護者との交流の場面もあまり見られず、そこも、父親Aと比較対象となった。

父親の子どもたちとのかかわり方が、「決して見てないわけでない」ことにも気づき、次のように語った。

① 父親Bと第2子のかかわり

Nちゃんが、お父さんの似顔絵を描いて「パパ」って持っていったら、とっても喜んで、その時「子どものこと、好きなんですよ」って自分で言ったんです。
ああ、そうなんだなって思いました。

② 父親Bと第2子のかかわり

Nちゃんが使ってたおもちゃを、ほかの子が持って行った時も、「あっ、持って行っちゃたね」みたいに、軽く言って。

③ 父親Bと第1子のかかわり

Nちゃん（第2子）が、お兄ちゃんがバズルするのを追いかけて、一緒にトイレの前でやり始めたのを見て、こっちまで来て、そこじゃない場所でやるように言ったりしてましたから。

この様子を見て、「やっぱり海に生きてる男だから自由に（子どもと）かかわるのかなあ」と、その気負いのない父親の様子に対する感想を述べた。

また、「肩の荷を下ろす」という質問をしたが、父親Bは子育てを負担に思っていないのかもしれないということにも言及している。

この日に同時に母親（妻）からも聞き取りをする機会があったが、母親のほうは「広場」に対して「親子クッキング」が第1子の偏食の改善につながる希望を持っていることや、保護者交流に対しても、肯定的にとらえており、かなり、父親と育児に対するスタンスや、子育て観の違いがあるのではないかと語る。

(4) 学生自身の「父親観」の変化について

学生Wは、2回の聞き取り（父親A、父親B）を通して、「協力的な親も多たって思うし、お母さんとお父さんでは違いはあるけれど、こういう人は増えているのだと思います」と、述べた。

また、父親への子育て支援についても、「もうちょっと調べたい」と、語りながら、一人ひとりの父親が「したいこと」も違っているし、「こちらから伝える内容も、（その違いに合わせて）違うんじゃないかって」と、考えている。

(5) 父親の「子育て観」の育ちについて

母親（妻）が「本当に自由なんだから」と、父親を評しながら、「そのうち、子どもが（海に）行くようになるかも」という期待や、すでに第2子はプールで飛び込みまでやろうとすることなどを、好感をもって語る姿に触れながら、父親Bの「自由さ」が子育てに及ぼす影響について、なお、考えてみたいと語った。

9. 学生Tのインタビュー2回目の語り

(1) 学生が聞き取りを行った保護者

父親A：3歳 一卵性双生児 男児2名

（毎回、父親のみが参加する）

(2) 聞き取りの方法と内容

① 学生Tの父親に対する気付きや思い

「広場」に初めて参加した頃と比べ、お父さんが慣れてきたか聞いたところ、「自分は変わらない」と言いながら、「子どもは前より遊べるようになったかな」、「今は学生に頼って見られる部分がある」、「学生は体力があるからありがたい」と話していた。「学生への感謝が伝わる話だった」と、嬉しさを感じた。

父親Aは、「広場」に通ってからの子どもの成長や、学生についての思いを伝え、自分自身については「変わらない」と話したが、「広場」に参加する父親Aの姿を1年次から見ていた学生Tからすると、父親Aは変わってきたと感じていた。「子どもの傍から離れてピアノを弾いているし、学生に頼れる時もあるし、それって変わっているんじゃないかな」と、父親自身は気付いていない変化を捉えていた。

② 父親と母親、多胎児の子育て実態についての語り

「今は、お母さんは何しているんですか?」とお父さんに聞いたら、「平日は、育児はお母さんばかりで仕事で忙しくて、（子どもと）会話出来るか出来ないか位だ」という話や、「お母さんは家事が土日じゃないと出来ない。だからここ（広場）に連れて来ている」という話をしてくれた。

そこから、「双子だから常に同じ年の子どもがいて、ケンカもするし仲がいい時もあるし」、「二人が違う玩具に興味を持って、バラバラな方向に行くとどうしようとなる」と、双子の子育てについての話も聞くことが出来た。

学生Tは、父親Aから、平日は一人で双子の子育てをする母親（妻）を気遣う言葉を聞き、労働環境から子育てに参加しにくい父親と、子育ての負担がのしかかる母親の実態を感じたことについても語った。

父親Aが「二人で来たらいいんですけどね」と話したことに触れ、「本当は一緒に来たいんじゃないかな」、「双子だから夫婦で参加した方が、本音としては楽だと思っているのかも」とも述べた。

(6) 父親に対して思うこと

「ここ（広場）のお父さんは、他の保護者との会話がすごく多いなと感じる」、と話した。それは、「広場」に頻繁に参加していることで保護者同士の仲が深まっているからなのか、そもそも「広場」に参加している父親のコミュニケーション能力が高いからなのかは分からないそうだが、「すごくいいと思う」とも述べた。

また、「まだ、保育者としてお父さんも含めた保護者と接している自分を想像出来ないけれど、以前よりも、お母さんだからしゃべりやすい、お父さんだからしゃべりにくいというのは無くなったかも」と、以前よりも父親と接することへのためらいが無くなったことを話していた。

10. 学生Rのインタビュー2回目の語り

(1) 学生が聞き取りを行った保護者

父親C：7歳 男児

（毎回、父親のみが参加する）

(2) 聞き取りの方法と内容

① 父親Cの子育て実態と学生Rの気付き

お父さんに何気なく、「いつから来ているんですか?」と聞いたところ、「3歳の時から来ていて、知り合いの紹介で来ました」と話していた。

自分からお母さんのことにも触れて、「今は、家でリラックスしているのかなあ」と言い、私が「(子育てで) 悩みがあった時は、夫婦間で話すんですか?」と聞いたら、「夫婦でも話すし、幼稚園や小学校の先生にも話します」と教えてくれた。

「広場」のいい所も聞いたが、一番最初にお父さんの口から「学生と一緒に遊んでくれるから目が離せるし、他の親とも話せるからリフレッシュになれるんだよね」という言葉が出た。「のびのびしている所と答えると思っていたが、意外だ」と感じた。

学生Rが子どもと遊んでいる際、近くにいた父親Cに何気なく聞いた話であるが、「広場」に参加するメリットとして、父親が学生の存在を意識していたことに、驚きと嬉しさを感じていた。

(6) 父親に対して思うこと

「子どものことを聞くと色々答えたり、他の保護者にアドバイスする姿があって、ここ（広場）だけでなく、いつもよく子どもを見ているんだなと思います」、「まだまだお母さんよりはかかわっていないけれど、お父さんなりに頑張っているんだなと思う」と述べ、「きっと奥さんの誉め言葉があると、もっと自分に自信がつくんじゃないかな」とも話した。

V. 学生の父親への子育て支援観の変容を考察する

学生へのインタビュー結果をみていくと、1回目、2回目どちらにおいても、父親とのかかわりを通した様々な思いや気付きから、父親への子育て支援観に変化が表れていることがうかがえる。

内容分析からは、1回目のインタビューでは8つのサブカテゴリーと4つのカテゴリーが見出され、(表3) 2回目のインタビューでは12のサブカテゴリーと3つのカテゴリーが見出された。(表4)

インタビュー1回目では、「広場」の父親が子育てに積極的に参加していることや、自分が子どもだった頃の父親像と、小さい子どもを子育て中の昨今の父親の姿を比べ、その違いに気付くだけでなく、母親(妻)へも思いを巡らせている。父親と母親の子育てや、支援の違いを感じながら、父親が子育てにかかわることに好意的であることが分

表3 インタビュー1回目の分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー
「広場」の父親への気付き	「広場」の父親は、子育てに積極的にかかわっている、努力している
	父親それぞれに子どもへのかかわり方が違う
「広場」に限らない、昨今の父親への気付き	自分が子どもの頃の父親と、昨今の父親は違う
	昨今の父親は子育てに積極的にかかわっている
「広場」に参加している父親の母親（妻）への気付き	父親が「広場」に参加していることを母親（妻）はどう思っているのか
	「広場」に参加している時は、子育てに縛られず、自由に時間を使えるのではないか
父親、母親の子育てや、それぞれへの子育て支援の気付き	父親、母親の子育ては違う
	父親には母親とは違った支援の仕方がある

表4 インタビュー2回目の分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー
「広場」の父親への気付き	父親もそれぞれに子育て観を持っている
	父親も子育ての知識を兼ね備えている
	父親によって「広場」での立場、行動は違うが、それぞれに子どもを見ている
	父親も「広場」を通して成長しているが、気付いていない
	父親は「広場」の学生の存在を意識している
「広場」に参加している父親と母親（妻）の関係性への気付き	父親は、母親（妻）に言われてではなく、自分から子育てにかかわっている
	父親は子どもだけでなく、母親（妻）のことも考えている
	父親、母親、共に育ち合っている
	父親と母親では子育て観が違う
	父親が自信を持つために、母親（妻）からの誉め言葉がさらに必要である
父親への子育て支援の気付き	父親にも「広場」のような支援の場は必要である
	父親によって支援の仕方違う

かる。

一般的な母親中心の子育てに疑問を抱く一方で、社会、労働環境の実態から、子育てはどうしても母親中心となるのは致し方ないことであると捉え、父親、母親の支援の仕方は同じでなく、それぞれに違う視点、方法で支援すべきなのではないかとの考えも垣間見られた。

インタビュー2回目では、学生Nと学生Wは、「広場」で父親とかかわる機会が多かったこともあり、子どもや母親（妻）に対する思い、子育て観といった、父親の本音とも言える話を聞き取っている。インタビューの場面だけでなく、「広場」参加後のカンファレンスなどの場面においても、母親中心である子育ての現状を理解しながらも、父親が母親の脇役である訳ではなく、母親自身は、自分が中心となり父親を育てているような感覚を持っているものの、実は、父親が「広場」に参加することが母親への支援になっていることや、子育てを通して父親、母親どちらも育ち合っているという言葉があった。学生が一步踏み込んだアプローチと父親への理解を得ていると捉える。「広場」において父親とかかわる機会が増えると共に、父親理解や子育て支援への理解が深まる過程を読み取ることが出来た。表3、4を基に、学生の子育て支援広場における父親への子育て支援観の変容を図で表す。(図1)

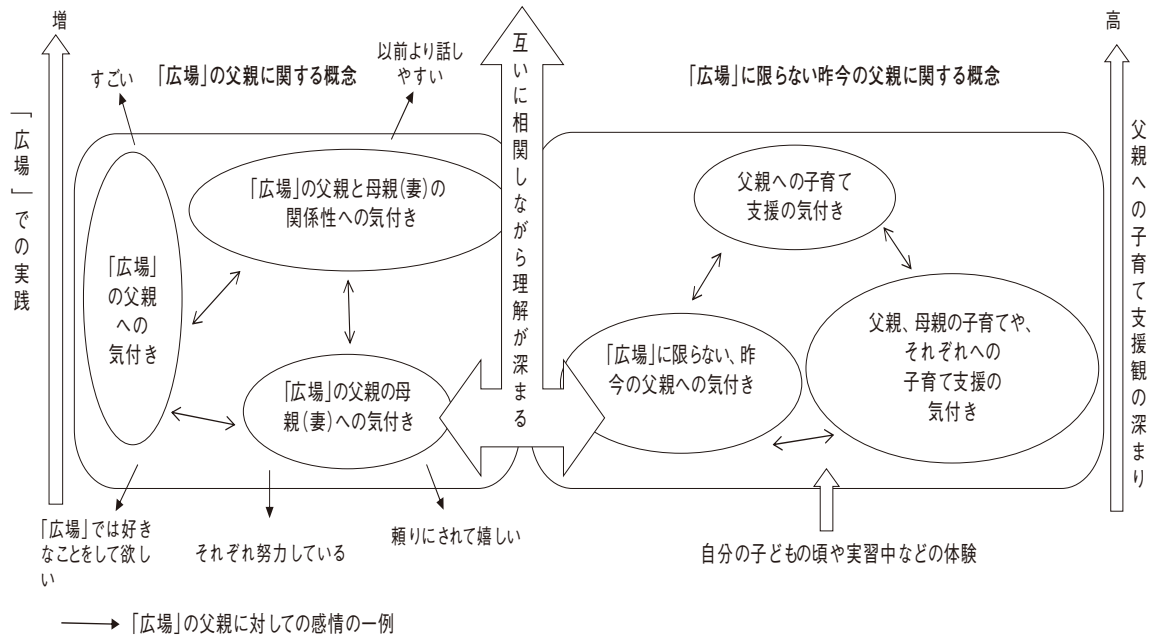


図1 子育て支援広場における、父親への子育て支援観の変容

VI. 学生の父親への子育て支援観を育む意味とは

学生へのインタビューの結果も踏まえ、「広場」での実践を通し、学生が父親への子育て支援観に関して学び取ったことや、父親への子育て支援観を育む意味について示す。

インタビューの結果から分かるように、学生は「広場」への参加を積み重ねながら、父親と接することへの抵抗感、戸惑い感が少なくなってくる。「広場」に参加する父親を含め、昨今の父親に対する学生の感じ方は、学生が育ってきた家庭環境や、それぞれの抱く性別役割観も影響するかも知れないが、インタビューをした学生達は、「広場」の父親が積極的に子育てに参加することや、時間が無い中でも子どもとかかわろうとしていること、母親を少しでも楽しみたいと思っていることに関し、自分の子どもの頃の父親像とは違うという新鮮さや、好意的な思いを抱いていた。

さらに、「広場」で接する父親の姿から、父親それぞれの子育ての仕方、子育て観があることを実体験として理解し、同時に、実習など「広場」とは違う経験も結びつけながら、昨今の父親像を捉えている。

また、「広場」に参加することを母親(妻)はどう感じているのか思いを巡らし、父親が「広場」に参加することが母親にどういった有益性をもたらすのかについても推察している。学生によっては、インタビュー後も、伝統的な父親観、家族観を持ち、「子育ては母親中心のもの」と考えていたが、「広場」を含め、昨今の多様な父親に拒否的な思いを抱くことはなく、父親も子育てをすることは重要であるという意識は、どの学生も共通であった。そして、父親と母親には子育て負担のアンバランスさ、子育ての仕方、子育て観の違いがあると感じながら、父親は、子育てへの時間、自由に使える時間が思うように取れず、父親によっては子育ての知識が母親に比べて不足していたり、学生自身の想像を超えて知っている知識があったりもするといった実態を踏まえたうえで、それぞれに合った支援が必要であることを学び取っていた。

これらは、学生の父親に対する見方だけでなく、子育て支援は、父親、母親などに限らず、それぞれの思いを大切にしながら、相手によって支援の方法、内容を変える必要があることや、決して母親に対する支援だけではないといった、子育て支援の基本姿勢を育むことに繋がると考えられる。さらなる実践を通して、高度な子育て支援理解へと導けることが示唆されよう。

興味深いのは、父親が学生に対し、筆者らの想像を超えて、自分について語っていたことである。学生の意図しない行動、先入観のない働きかけと、それに対する父親の応答は、本音ともいえる思いを引き出していた。筆者らのこれまでの研究では、「広場」に参加する母親の中には「保育者を目指す学生の役に立っている」という意識を持ち、学生に普段の子どもの様子を伝えたり、子どもと接する際のアドバイスをしたりしていた。保育者養成校における子育て支援の場に、母親が参加する意義を研究する中山（2019）は、学内で開催した「子育てカフェ」において、母親が学生に語る時間を設けた。母親自身が今までの自分を振り返ることに繋がり、学生と話すことは、気負いせずに話したいことを話せる良さがあったのではないかと述べている。本研究でインタビューをした父親にとっても、学生が、気を許しながら自分自身を言葉で伝えられる存在だったのかも知れない。子育てが家庭のみで行われるのではなく、家庭外にオープンに開かれることの有益性を、父親自身が理解しているとも言える。同時に学生は、父親と程近い距離を保ちながら、他者から話を聞く力をも養われている。

これらから、本研究では、「広場」の実践を通し、学生が父親と接することで、学生の父親像や子育て支援観が変容し、子育て支援力を育む一助となっていた。そして、「広場」における学生の姿は、子育て支援の本質を示すものであり、父親にとっても、学生がいることで子育てや「広場」での居場所を作る手助けとなったり、本音を話したり出来る存在となっていることが認められた。

2019年度に見直しをされた保育士養成課程の新カリキュラム³は、保育者の子育て支援における役割の重要性、ますます高まる子育て支援ニーズを鑑み、これまで以上に保育者に子育て支援が求められることを意味する内容となっている。今後も、「広場」などの実践での学びも含めながら、子育て支援力を育むための学修の充実を図っていきたい。

注

- 1) 2019年度は学内行事がある日を除き、土曜日に開催している。2006年度より本学で開催されている「親と子の広場」から派生する形で、2017年度から、土曜日は保護者主体で運営する「さくらっこ広場」、火曜日と金曜日は本学主体で運営する「親と子の広場」が開催されている。
- 2) 1学年定員50名で、必要な単位を取得することで、幼稚園教諭二種免許状、保育士資格を得ることが出来る。
- 3) 本学では、「子ども家庭支援論」、「子育て支援」及び、本学独自科目として開講してきた「保育相談実践演習」が開講されている。子育て家庭への理解、地域資源の活用に関する理解、保育者としての専門性を活かした支援についてなど、内容が広範囲に及ぶ総合的な学修となっている。

文 献

- 1) 石井クンツ昌子（2017）「育メン」とは何か——父親の育児参加の意味を探る——，別冊発達33号，p14-19，ミネルヴァ書房
- 2) 金坂尚人（2017）児童館における父親の子育て支援の実際，別冊発達第33号，p78-83，ミネルヴァ書房
- 3) 小崎恭弘（2017）父親の子育て支援とは何か，別冊発達33号，p2-7，ミネルヴァ書房
- 4) 篠田厚志（2017）父親参加プログラムの実践，別冊発達33号，p138-143，ミネルヴァ書房
- 5) 中山美佐・山本一成（2019）保育者養成校での子育て支援——「母親が学生に語る」ことから得られるもの——，大阪樟蔭女子大学研究紀要第9巻，p229-235
- 6) 長谷川美香・狩野奈緒子（2019）保育実践を基にした子育て支援力の育成——子育て支援広場での学生と保護者の関わりから——，桜の聖母短期大学紀要第43号，p105-118